

(現代語訳) 清元 四君子

ニワトリがガンガン鳴き出して、おお、華やかだなあ。

煌めくばかりの元旦の日の出か。

天岩戸の隙間からチラッと漏れ出してくる光のように、

神代もこうやって始まったのだろう。

明治天皇の御代の空は、静かに明けたのだなあ。

〈春の段〉

梅が咲いた香りは、たおやかな女の袂を通る東京の風さ。

官職の偉いおかた達も、ちよつと手を止めてくださいよ。

見上げると、二月、三月の桜は白雲のように咲いていますよ。

〈夏の段〉

暫くして、青葉の頃になってしまうと、

梅雨の季節がやってきて、

自然に雨の恵みで草木は高く育ちます。

おや、佳い香りのする藤袴草(蘭草)が、

薄紫の小さな房をたくさん付けているね。

まるで彼女が着ている、色目(模様)の襲が

そこに脱ぎ掛けてあるようだ。

時々風が吹いて、薫ってくるその蘭の香りは

凜として深い操のある、あなたのようなだよ。



〈秋の段〉

秋になるのを待って咲く、菊の花は、

表面には出ない地下水が、脈々と流れているように、

あなたへの想いをずっと保ち続けるという意味もあります。

また、人は長寿を喜ぶけれど、

菊にまつわる「菊水」や「菊慈童」の伝説もありますね。

東京の野辺に咲く黄金草(菊の異名)は、誰が貢いで、

その小金の敷を積み上げるのだろうか、誰も居はしない。

こんなにも花はしめやかなのだから。

〈冬の段〉

また此君(此君と読み、竹の別名)は、霜にも耐え、雪にも折れず、

何年も長く、空高く茂って影を落とす。

まるで、天子様の宮城が霜雪に耐えて何代も高くに聳えて、

我らはその影を仰ぐようだ。

竹の庭園(皇居の庭園)が長く保たれたいと願うように、人々は

天皇の御代が数えられないほど続くのを祝いしてきたのだ。

誠に美しい色の、菊花紋(天皇家の十六葉八重表菊)が栄える

明治天皇の御代であることよ。

令和五年五月十五日

大中臣正比呂 拙訳